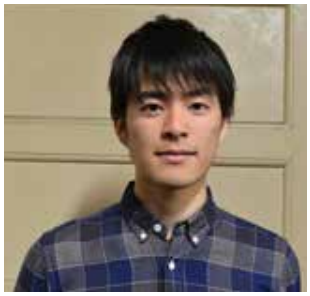
TEI 鼎談 DAN
学問と職業のカンケイから、大学進学を考える本
あなたは、まだ何にだってなれる。

東京大学 文学部

文学部は思想文化·歴史文化·言語文化·行動文化の4学科で構成。後期教養教育では思想·歴史·芸術·文学·言語·人間の行動などについて、第一線で活躍する教員が話題を提供します。専門を問わず、興味関心のある学生の受講を歓迎します。

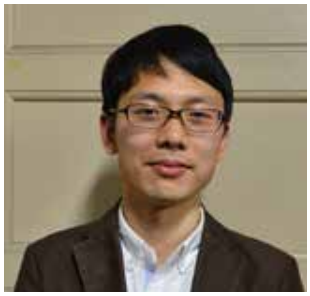




■大学生
前田悟 さん



■先生
渡辺裕 先生



■卒業生
後藤遷也 さん

CONTENTS

●プロフィール　●大学生活について　●就職活動、仕事について
●5年後に向けて　●高校生へのアドバイス

●プロフィール

東京大学文学部の特色を教えてください。



■先生
東京大学が創設された1877年に設置されたのが法学部、理学部、医学部、そして文学部でした。当時の文学部は、2科に分かれており、史学・哲学・政治学を研究する第一科に対し、第二科では和漢文学科を研究していました。長い歴史の中で、当学文学部は日本の学会を担う優秀な研究者を数多く輩出し、学問を牽引してきました。現在は、思想文化学科・歴史文化学科・言語文化学科・行動文化学科の4つの科に分かれ、より多彩な分野を扱うように発展しつつ、歴史と伝統を重んじながら優秀な研究者の育成とさらなる研究の進展に努めています。
歴史を重ねると不思議な力を持つものなのか、私が学生として初めてこの文学部の校舎に足を踏み入れた時、何かが棲んでいるような独特の空気感を感じたのをいまも憶えています。建物自体も大変歴史あるものですが、この高い天井と集められた貴重な資料類、そして多くの先達たちがここで研鑽を積んできたという事実が、その空気感を醸し出しているのでしょうね。昨今は全学でグローバルに活躍できる人材の育成に重点が置かれ、文学部も同様に力を入れていますが、この伝統や空

気感というのは私たち教鞭を執るもの、ここで学ぶものが守っていくべきものだなと感じています。これは東京大学の特色になりますが、本学では１～２年生の間は全員が教養学部に所属し、基礎的な講義を受講し、その間に、自分が進学したい学部、専攻などを決めることができる仕組みになっています。入試の時だけでなく、大学に入学した後にも、自分が何を学びたいかいろいろ考える中から自分のやりたいことを見つける期間があるので、その間に学問のおもしろさに目覚めて、問題意識をしっかりもってやってくる学生が多いように思います。文学部も３年生になる際に、学科の中のどの研究室に入るかまでを選択しないといけないのですが、対象の幅が非常に広い上に、高校までにはお目にかかったことのないような学問分野も多いですから、それぞれにいろいろ考えをめぐらせてやってくる多彩な人材が集まっている気がします。後藤君と前田君の二人も、そして私も含め、それぞれに独自の経緯を経て美学芸術学にやってきたということでしょう。

先生の研究内容について教えてください。

■先生

私は小さな頃からピアノをしていたこともあり、最初は西洋音楽、それも主にクラシック音楽の研究を手がけていました。当時は現在と音楽文化全体が異なっていて、クラシックをやっている人はもっぱら「クラシックの人」で演歌もロックも聴かないような時代でした。私もそんな「クラシック・オタク」の少年のひとりでした。

でも、クラシックを研究する中で、ふと、自分はなぜ西洋の音楽に関心をもつのだろう、日本人が西洋音楽をやるというのはどういうことなのだろう、などという余計なことに関心を持ちはじめてしまいました。他の「クラシック・オタク」のように何も疑問を感じずにやっていればよかったものを、そんなことに手を出しはじめたために、私はすっかり足を踏み外してしまったんです（笑）。そういうつもりになってみてみると、われわれの身の回りには、妙な「西洋音楽」がたくさんころがっています。チンドン屋なんかも、通常は西洋音楽と思われていませんが、日本が西洋音楽を自分なりに勝手に受容して展開することで生まれたものなのですね。そういうものは、これまで変なものくらいにしか思われず、片隅に追いやられていたのですが、考えようによっては、そもそも文化とはそういうものです。西洋の文化だって、たとえばオペラは「高尚」な本格的文化だと思われているかもしれませんが、起源をたどるとギリシア悲劇を復興させようとしたイタリア人が、勘違いして作ったものが現在の形のもとになっているのです。私はそういった経緯を知るにつれ、異文化を自文化に取り入れる際、「人はどのようなことを考えるのだろう」、そして「取り入れられたものはどのように変化していくのだろう」ということに興味を持つようになりました。

ある文化が他の文化に取り入れられた時、その生きた現場を調べると、そこには様々なものが機能して変化を巻き起こしていたことがわかります。それは必ずしも理論通りに説明できるものではありません。変化して、ぶつかり合って、思いがけないものが生まれたりもします。そして、それが新しい文化になっていくのです。例えば、駅で流れている電車の発車を知らせるメロディや SL の音を入れた CD が発売されていますね。果たしてあれらは音楽なのか。たぶん CD になっている時点で、それは何らか価値のあるものと思われているわけですが、その捉え方も、時代によって、また人によっても様々に違います。音楽としておもしろいという見方もあれば、ノスタルジーにひたる人もいるだろうし、細かいところを聞き分ける「鉄ちゃん」みたいな人もいるでしょう。そういう様々な見方や価値観がどのように繋がりあったりぶつかりあったりしながら動いてゆくのか、それを考えるのが文化を考えるということだと私は思うのです。「音楽」や「芸術」も、別にそれだけが宙に浮いて存在しているわけではないのですから、その意味や価値を考えるためには、まず社会全体の歴史や動きといった大きな連関の中でとらえ直すことが必要になってきます。音楽、芸術、文化、そして美というものが成り立ち、変容してくる過程について、そのように社会の動きや変化との関わりの中において考えてみようというのが私の研究です。

■卒業生
先生のこのお話に非常に感銘を受けて、自分も芸術についていろいろ考えるようになりました。私は卒業論文を『初音ミク』について書いたんですよ。
■先生
あれはよく書けていましたね。私の研究室では、研究室で作っている論文集にすぐれた卒業論文をときどき載せるのですが、彼の卒業論文を採用させてもらいました。

卒業研究のテーマは何ですか？



■卒業生
テーマは「芸術と芸術じゃないものの差」とでもいいましょうか。
例えばマルセル・デュシャンという芸術家がいます。彼は男子用小便器に「リチャード・マット」という署名を書いて『泉』というタイトルをつけました。この作品は現在、何十億円という値段がつけられ、美術品と見なされています。でも、自分が同じように便器に自分の名前を書いても、芸術品とは、決して認められないでしょう。同じことをしているのに、そこには芸術と非芸術の線引きがある。これはなぜだろう。実は、そのことについてずっと高校生の時から考えていたのです。それもあって渡辺先生の美学芸術学研究室に進学しました。
現在アートと呼ばれるものには、一定のルールが決められています。規定の段取りを踏んで制作されたものを「これは芸術だ」と認める流れがあるのです。また、美術館に収蔵されれば、芸術と見なされるという暗黙の了解もあります。一方で、世の中には「アウトサイダーアート」と呼ばれるものがあります。これは正規の芸術に関する教育を受けてない人、時にそれは障がいを持っている人など、が手がけた作品を指すことがあります。教育を受けず、事前知識も持っていない人が生み出した作品が、見る人に大きな衝撃・感動を与えることがあるのです。それを通常のアートの範疇からは外れた「アウトサイダーアート」と呼ぶのです。そこに、私は違和感を感じるのです。
私の故郷、新潟県では３年に一度、屋外展示を主とした『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ』が開催されます。有名な芸術家が、作品を田畑に設置して、名前をつけて公開します。たくさんの観光客が訪れ、気軽にアートに触れられる機会として人気があります。また、設置されたその風景そのものをアートととらえ、作品として発表する芸術家もいます。でも、そこに住む人たちの多くは、芸術を学んだことのない人です。知識や興味がない人もいます。ですが会場に選ばれ、普段目にしない作品が設置されるのを見て、触れ、「自分も作ってみた」と作品を作って展示する人もいます。では、その作品はアートではないのでしょうか？
芸術を考えるとき。私はこの違和感と疑問を抱くことを禁じ得ないのです。そこで、いろいろ調べるうちにたどり着いたのが、『初音ミク』でした。音階と歌詞を入力すると、リズムに合わせて歌ってくれるPCのソフトです。このソフトの特徴は、誰でも簡単に曲が作れること。そして発表の場も用意されていること。そのことで、誰もが匿名で自作の発表が可能なことです。このソフトで作られ、有名になった楽曲も多くあります。つまり、正規のルートを経ないで、そして有名無名のハードルを無視して、音楽作品を世の中に発表することができるのです。では、この音楽は芸術ではないのでしょうか。ますます「芸術」の定義が曖昧となっているのです。そのことを卒業論文に書いたわけです。
■先生
初音ミクというのはおもしろいね。これまでとは違う形での音楽創作を可能にする仕組みを提供しているものとして、講義で取り上げたことがあります。

■卒業生
実は初音ミクにたどり着いたのは、先生のおかげです。先生のアンテナは広く、新しいものへの興味もすごく旺盛に持っていらっしゃる。だから学生も刺激をもらいながら、いろんなことに興味関心を持って取り組めているんだと思います。
■大学生
私は自分の好きなファッションについて取り上げようと思っています。いまは「ファストファッション」が流行しています。大量生産された安価なファッションです。季節ごとに簡単に取り替え、着替えることができるのが特徴です。いわば、使い捨て感覚です。
よく聞くのは「大量生産されたファストファッションには個性がない」ということ。でも、ファッションは個性を生み出す手段のはずです。では本当にファストファッションで個性は生まれないのか。私はそうではないと思います。チョイスの違いや着こなしだけでなく、その人の性格や雰囲気なども加味することで、個性を作ることができると考えます。
また、ファストファッションはこれから歴史に残らないのかという議論もあります。そういう「未来のファッションのあるべき姿」についても考察したいと思っています。
そういう意味では、ジャンルは違いますが後藤さんのテーマに似ていると言えるかもしれないですね。
どういう話に持って行くか悩んでいるところです。
■卒業生
そのテーマは面白いですね。
■先生
展開をどうするかで、すごくいい論文になると思いますよ。
文学部というところは、本当の様々なジャンルがあるのですが中でも「美」や「芸術」については、生活の中でのちょっとした体験から神様の作った宇宙の美しい秩序まで、ありとあらゆる場面が対象と言ってもいいくらいです。興味がある分野に対しては、どんなことでも取り組めるのが特徴と言えるかもしれませんね。
私の研究室は３人の教授で学生の幅広い卒論に対してアドバイスしたり評価したりしているのですが、思いがけない世界の話が次々出てくるので、なかなかカバーしきれず、とても大変です。しかしその分、私たちも刺激を受けることができていますね
■卒業生
卒業論文を提出した後は、口頭試問という面接のような時間があります。ここで内容や論拠について教授陣から質問を受け、答えなければなりません。私はテーマも『初音ミク』でしたし、「書き直せ」「こんなの卒論じゃないぞ」といわれたらどうしよう、と内心ドキドキと緊張して臨んだのです（笑）。でも、実際は「面白く読んだよ」「ここのところ詳しく教えてくれないか」と先生たちがすごく興味を持って質問をしてくださって、びっくりしました。この雰囲気が美学芸術学研究室の特徴ですね。先生方がだれも居丈高じゃない。そのおかげで学生がほんとうにのびのびと自由に研究に取り組めるんだと思います。
■先生
音楽、文学、演劇といった狭い意味での芸術ジャンルだけでなく、本当にいろいろな対象があるので、極端に言えば、自分が美だと思えば、何を取り上げても OK という雰囲気なのかもしれません（笑）。でも、そういう対象をやろうと思うと、参考にできる先例がないことが多いので、自分の頭でしっかりと考え、真剣に取り組まないと自分の議論は組み立てられませんね。

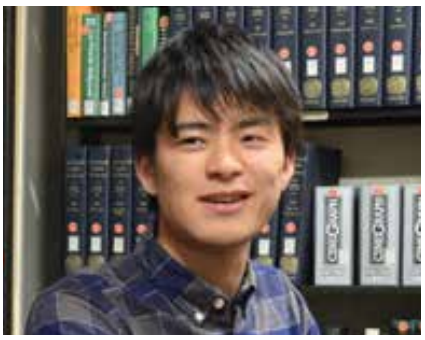
●大学生活について

お二人が東京大学を志したきっかけについて教えてください？

■卒業生

実家の新潟県には、それほど予備校もたくさんなく、高校時代はＺ会をやっていました。選択したのは「東大コース」。理由は、親が「そういうコースがあるんだからやってみなさい」といったという…（苦笑）、実は父と兄が東大出身で、目指しなさいという雰囲気もありましたね。自分も大学に行くのであれば、総合系の学部と考えていましたし、まだ将来やりたいことは決まっていませんでしたが、東大であれば将来の可能性も狭まることがないだろう、と。

ただ、高校時代はサッカー部に所属していて、３年生のかなり遅い時期まで部活に打ち込んでいました。受験勉強を本格化したのは、かなり遅い時期だったこともあり、結果的にＺ会の「東大コース」が受験勉強のメインになりました。そのコースはまさに東大を受けるためのコースで、ほかの大学の入学試験対策には応用できないんです。そういった意味では、私は東大のための勉強しかしてませんでしたね。ほかの大学の対策をする時間もなかったですし、結果的に東大だけを受験しました。



■大学生

私も似た感じですね。母校は熊本県の進学校ですが、戦後誰も東大に合格していないという高校だったんです。たまたま高校１年生で受けた模試で東大に合格判定が出たこともあり、先生からも「チャレンジしてみたら」とアドバイスを受けました。私自身も、やるからには一番上を目指そうという気になりました。だから、東大のための勉強だけをしていましたね。

ただ、私は二浪しました。現役時代は、単純に勉強量が足りませんでした。一浪の時は、浪人する同級生も多く、人間関係に流されたという感じでしたね。勉強量はまだまだ足りませんでした。なにより、東大になんとしても受かりたいんだ、という覚悟が足りませんでした。それから自分は大学に入って何がしたいんだ、どんなことができるんだということを、調べはじめ、文学部に興味を持つようになりましたね。それでやっと二浪の時に覚悟も、勉強方法も定まったという感じです。二浪しましたが国立大学しか受けていないので、背水の陣でしたね（笑）。

では東大の中で文学部、それも美学芸術学研究室を選んだ理由について教えてください。

■卒業生

高校時代から「芸術と非芸術を分けるもの」ついて興味があったことは先ほど話しましたが、当時は「文学部って文献とにらめっこするところ」というイメージしかなかったんです。でも、高校時代に東大文学部出身のナム・ジュン・パイクさんの訃報を新聞で見て、作品を知り「こんなかっこいい作品を作る人も在籍しているんだ」と思ったのが最初のきっかけです。文Ⅱを受けて、経済学部に行くかを悩んだこともありましたが、数学が苦手だったことと、やはりナム・ジュン・パイクさんの作品の印象が強くて、文学部を選びました。

■大学生

私も学部は悩みました。最初は法学部志望でした。しかし法律について知り、事件や実情を調べる中で、法律に幻滅してしまったんです。数学は得意だったのですが、経済は自分がやるイメージがわかず、結果として文学部を選択することになりました。その当時は私も「なにをやりたい」「なにになりたい」という明確なイメージがなくて、その相談をしたところ「大学で好きなことを見つけて来いよ」とアドバイスをもらいました。好きなことができる幅があるのは文学部だろうと考えて、文Ⅲを受験しましたね。

■卒業生
美学研究室を選んだのは、自分自身が「文学部であれば芸術に関する勉強がしたい」と思っていたことが大きいですね。教養学部にも舞台芸術や演奏に関しての学問を研究する科はあります。ただ教養学部はどちらかというと新しい分野を研究しているイメージがありますね。迷ったのですが、前期課程で受講した表象文化論と美学の授業で、私は最先端ではなく、伝統などをまず学んで、現代を見据えたいと思ったのが、文学部でこの研究室を選んだ理由です。
特に庭園論は面白かったですね。1 年生の 1 学期に受けた講義ですが、「庭園には思想があり、原点はエデンの園である」といったことを学ぶのです。正直言うと、現代で生きる上で必要な知識じゃないです。でも、人生にとって大切なことに触れている感覚があったんですね。
■大学生
私も取り組みたいのが服飾だったので、この研究室を選びました。選択の際には、それまでの自分を振り返ることもしました。どうして「ファッションが好きなのか」も掘り下げて考えました。「何かを表現して、それが受け取られるプロセスに興味があるからだ」とわかったのです。それが一番の動機ですね。
■卒業生
教養学部だと 4 年間を駒場キャンパスだけで過ごすということにも抵抗があったね。せっかくなら、赤門のある本郷キャンパスに通いたい（笑）。
■大学生
確かにそうですね。

研究室ではどんな研究をするのですか？

■先生
研究という意味では、柱になるのは卒業論文を書くことです。われわれの分野の場合、各自が自分で卒業論文のテーマを選び、そこに向けて資料を集め、検討、分析を加えて論を作ってゆく形になることが大半なので、その部分は一人での孤独な作業になりますね。
もちろんそうは言っても、ただ自力で全部やれと言われても、できるはずがありません。資料を集めるとはどのようなことなのか、どういう読み方をしたらよいのか、そこからどのように問題を切り出してくるのかといったことについては、演習形式の授業で読み書きのリテラシーを学んだり、海外での最新の研究を皆で講読したりといったことを通して、いわば基礎体力を養ってゆくことで、ようやく少しずつわかってくるところもあります。4 年生には卒論の中間発表もやってもらっていますが、他の学生の研究について聞いたり、それについて皆で議論したり先生のコメントをきいたりといったことが自分の研究にはねかえってくることも多いのではないでしょうかね。
大学院になると、もう少し各自が自分のテーマで研究することが中心になってきます。われわれの研究室では「コロキウム」というゼミがその軸になっています。
教員から学生までが全員集まって、自分が今中心的に取り組んでいる研究内容を全力投球で発表するというゼミです。年齢順に順番が回ってくるので、ここ数年は私がトップバッターなのですが（笑）、教師だからといって容赦されることなく、厳しい質問や批判が飛んでくるので大変です。
領域や対象が多様である分だけ、聞いてくれる人が門外漢であることも多いのですが、そういう人にもわかるような言葉で自分の研究を伝えることは、実はなかなか難しいのです。しかし、研究が社会の中で生きたものとして意味をもつためには、それを避けて通ることはできません。逆に言うと、そういう場で鍛錬されることは、必ずしも学問の場だけでなく、社会に出てから自分のアイデアや考え方を他の人に伝え、現実のものにしてゆく上でも役に立つと思いますよ。

●就職活動、仕事について

現在のお仕事について教えてください。またその就職先はどのようにして決めましたか？



■卒業生

学生の時には大学院に進学することも考えていました。でも、もし文学部で大学院に進学して教授を目指すとしたら、たくさんのとても優秀な先輩たちに認められるような研究をしなければなりません。自分にはそれは厳しいな、と思い就職活動を始めたのです。

自分がやってきた「芸術・非芸術」についての研究は、社会に広く問うことでより発展的に追求していけるテーマだな、と思ったことも就職を選んだ理由です。いろんな人に自分が考えたことを聞いてもらい、議論してもらいたいなら、研究室の中だけで追求するだけが道じゃないと思ったのです。それで社会と広く接点を持てるマスコミを志望しました。

現在は NHK エンタープライズという会社で、テレビ番組を作っています。「若手のうちはいろんな経験をするべきだ」と様々なジャンルの番組を担当させてもらっています。マスコミを志望した最初の動機である「美術について議論する番組」というのはなかなか実現しません。でもそのエッセンスは手がける番組に注入することができますし、それを続けていい番組を作ることで、いつか自分が思う理想の番組を作るチャンスも得られるのではと思っています。

大学で学んだことでいまの仕事の役に立っていると感じることはありますか？

■卒業生

ありますね。私は村上春樹が好きなのですが、彼の言葉に「何かを人に呑み込ませようと思うとき、あなたはとびっきり親切にならなくてはならない」というものがあります。これは大学で論文を書くときにも意識していましたが、伝え方ってとても大切だと思うんです。

最初はとてもわかりやすく、間口の広い表現で始める。それこそ卒論で取り上げた『初音ミク』とか。すると、人は興味を持ってくれる。話を聞こうという姿勢になってくれる。そこから興味深い、わかりやすい言葉で論をさらに展開していけば、とても簡単なとっかかりからスタートしても、すごく難しい、深遠へと人を連れて行くことができる。これは常に意識していますね。先ほど先生が話された、コロキウムの考え方と同じだと思います。

就職したい業種や仕事は決まっていますか？

■大学生

ファッションだけでなく心理学や哲学にも触れる中で、「表現する」ということ、「表現されたものがどのように受け取られるか」ということに魅力を感じています。その点で、身近な表現である「まち」に興味を持つようになりました。また、個人的な就活の方針として「自分がしたことが人に恩恵を与えるものとなり、それを自分が見ることができる」仕事を探しています。以上のような点で、鉄道や不動産、食品メーカーや 商社など、幅広く興味を持っています。

そういう仕事をするとすれば、大切にしなければならないのは「お客様視点」だと思います。直接、お客様と触れ合う仕事でなくても、この視点がなければビジネスは成功しません。そこにはいま勉強している、「一つの物事に対して、人はどんな感想を持つのか」ということが役に立つのではないかと思っています。

● 5 年後に向けて

5年後に皆さんは何をしているでしょうか？

■大学生



就職して、先ほど話したようになにか表現する仕事を手がけていたいですね。
故郷である熊本県も大好きです。もしかすると、地元に帰って、先ほど話したような仕事に従事しているかもしれません。どこにいても、人の役に立つ仕事をしていたいと思います。

■卒業生

東京オリンピックの年ですね。もうオリンピック関連のプロジェクトはスタートしています。私もその頃には 30 代半ば。現場に出ないプロデューサー業務を担当する機会も出てくる年齢です。でも、自分はいつまでも現場に出ていたいですね。この仕事を始めて知った楽しさですが、世の中には本当にたくさんの人がいて、その人から話を聞くだけでとても面白いんです。そんな仕事を 5 年後もしていたいですね。そして「取材をしてくれたおかげで、物事がいい方に動き出した」とか「番組に勇気づけられた」といった声をもらえたら、自分の仕事も報われるな、と思いますね。

■先生

5 年はあっという間ですね。でも西洋音楽の研究からスタートして、現在は全く違った研究をやっている私ですから、5 年後は思いもしなかったテーマの研究を手がけているかもしれませんね。
実は私が一番最近書いた論文は、東京の高速道路の景観についての論文なんですよ。日本橋の上にかかる高速道路が景観を破壊したなどと言われ、非難されることが多いのですが、建設当時の報道資料や文献を見てみると、インターチェンジなどで道路が描き出す幾何学的模様を、これぞ未来都市的な美だ、というような感じで絶賛しているものも多いですし、また逆に最近になると、「水路マニア」みたいな人が出てきたりして、船で川を遡上して水面から見上げるという新しい視点をとることで、上にかぶさっている高速道路の隙間から漏れてくる太陽の光が水面できらめいて描き出す思いもしなかったような美を発見するといったことがあり、ただひたすら高速道路の下を遡行してゆくような、「環境ビデオ」的な作品が作られたりもしています。私の関心は、そうやって時代の変遷や視点の変化とともに、物事の意味合いや価値観がどんどん変わり、美や芸術のありかもそれとともに変わってゆくというところにあったのですが、それ以上に、私の興味の対象自体が時代とともにどんどん変わってしまっているのですね（笑）。5 年後にはまた、何に関心を持っているやら、われながら末恐ろしいです。

●高校生へのアドバイス

大学受験を控えた高校生にアドバイスをお願いします。

■大学生

「なんでだろう」「どうしてだろう」という疑問を、自分がしていることに投げかけるということをして欲しいと思います。勉強ではただ鵜呑みにする、暗記するだけではなく、そういう疑問を持つことで、自分のわからないポイントが鮮明になります。友人と話している時にも、「そこにはどんな意図があるのだろう」と考えることで、より他人の考えに敏感になれます。
実は私は国語が大の苦手でした。でも、二浪して「どうして大学に入りたいんだろう」「東大なのは

どうしてだろう」と考えました。それで自分の思いも明確になりましたし、国語の文章を読んでも意図が明確につかめるようになったんです。そこからは成績が向上しましたね。

■卒業生

大学を卒業する際の謝恩会で、渡辺先生からいただいた言葉がとても印象残っています。

「短期的に答えや効果が出るものは重要じゃない。長い時間をかけて取り組むものが、人生にとって大切だ」。大学に合格することはゴールではありません。その先にはまだまだ勉強する日々が待っていますし、大変なことも多くあります。でも、いまやっていることはそこでも役に立つ。人生の大切なことに取り組んでいるんだ、と考えて長期的な視野を持って取り組んでもらいたいですね。

■先生

ずいぶん前のことですが、民放のテレビ番組で、「アホという言葉を使う地域とバカという言葉を使う地域の境界線」ということについて調べるという内容のバラエティ番組がありました。ある意味では「学問以前」みたいな感じすらする他愛のない話題ですよね。

番組では、大学の教授に意見を求めたり、全国的にアンケート調査を行ったりしながら、その境界を探していったのです。もちろんお笑い番組ですから、全体は受け狙いのおもしろおかしい作りの番組ですが、そのうちにプロデューサーが本気で興味をもって資料探しをはじめてしまい、ついには、京都中心に同心円を描いて言葉の使用が広がっていくという、柳田國男の「方言周圏論」という考え方を実証するような結果を引き出すことに成功したのです。このプロデューサーはその結果を日本語研究の学会で発表するまでになりました。その経緯は、『全国アホ・バカ分布考――はるかなる言葉の旅路』（松本修著／新潮文庫）という本にまとめられていますが、番組の方も、その年のすぐれた番組として、民放の番組に与えられる様々な賞を総ナメにしました。

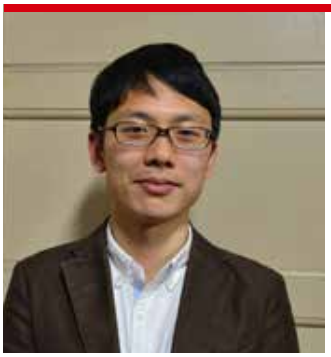
このように、学問的に考えるということは、別に研究の世界の話だけで求められる話ではないのです。純粋で単純な疑問からいろいろなことをしっかり調べ、考えてゆくことで、いろいろな形での大きな成果が得られるのです。学問を受験勉強のようなものと考えてしまうと、単純な暗記と事実の応用に終始してしまいます。でも、単純な疑問を放置せずに、そこから出発していろいろなことを徹底的に調べてゆくことで、もっとずっと生きた学問が築かれてゆく可能性がある。それを知れば、学ぶことは楽しくなると思います。生きた形で知識を増やしていく。そのためにも、いろんなことに疑問を持って追求して欲しい。そのことはただ単に、将来の研究者を生むことになるかもしれないというだけでなく、社会のいろいろな局面で多様な、また奥行きをもった考え方をすることのできる良き社会人を生み出すことにつながり、社会を豊かにしてゆくことにつながると私は信じています。

●インタビューに答えていただいた方々●



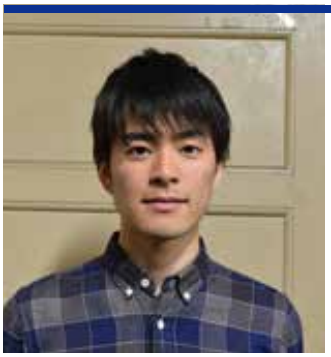
■先生

渡辺裕先生



■卒業生

後藤遷也さん



■大学生

前田悟さん

※内容は 2015 年 2 月当時のものです。